

# 学 位 論 文 要 旨

氏 名

前場洋佑



論 文 題 目

「COVID-19 流行下における地域在住高齢者の  
精神的苦痛に影響を与える要因」

指 導 教 授 承 認 印

今井忠則



# COVID-19 流行下における地域在住高齢者の 精神的苦痛に影響を与える要因

氏名 前場洋佑

## 【はじめに】

地域在住高齢者にとって社会活動を通して生きがいを持つことは、健康的な生活を送るために重要である (Okuzono, 2022). そのため、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行により、長期的な活動制限が高齢者の健康に及ぼす影響については大きな懸念が持たれている. 先行研究において社会活動の制限に伴う健康被害は、2011 年の東日本大震災などの過去の災害後に様々な報告がされている (Ito, 2016; Tomata, 2015).

COVID-19 は 2019 年 12 月に中国武漢で初めて報告されて以降、世界的に感染が拡大し大きな影響を与えている (Huang, 2020). 本邦では、2020 年 1 月 15 日に国内で初感染が確認され、その後国内で感染が拡大していった. 感染拡大を防ぐためには、人との接触を可能な限り減らすことが重要であり (Flaxman, 2020), 不要不急の外出の自粛, 身体的距離の確保や 3 密 (密集, 密接, 密閉) を回避する新しい生活様式が推奨された. しかし, そうした感染予防対策により高齢者の社会活動の機会は減少しており, 社会活動の制限や自粛といった日常生活の変化は, 身体的・精神的に大きな影響を与える可能性がある.

COVID-19 流行初期から高齢者の社会活動や精神的健康については多くの報告がされている. 社会活動に関連する研究では, 長期間の自粛生活による身体活動量の低下 (Yamada, 2020), 対人交流の減少 (Krendl, 2021), 余暇活動への従事の減少 (Shen, 2022) などが報告されている. また, 精神的健康については, 問題の中核となる新型コロナウイルスへの罹患に対する恐怖や不安だけでなく, 活動が制限されることによる精神的苦痛への影響も報告されている (Callow, 2020; Carriedo, 2020; Heid, 2021).

これらの研究より COVID-19 流行下における高齢者の精神的健康が, 様々な要因によって影響を受けていることは明らかである. したがって, COVID-19 流行下での精神的健康への影響を検討するためには, COVID-19 に対する恐怖感だけでなく, 生活習慣の変化, 余暇活動への従事状況などを包括的に考慮する必要がある. しかし, 先行研究ではそれぞれが 1 対 1 の相互作用に焦点を当てただけで別々に検討されており, COVID-19 への恐怖, 生活習慣, 余暇活動, 精神的苦痛の関連を包括的に調査したものは見当たらない.

## 【目的】

本研究の目的は, COVID-19 流行下での地域在住高齢者の COVID-19 への恐怖, 生活習慣, 余暇活動, 精神的健康の関連を明らかにすることである. そのため, それらの変数に関する仮説モデルを作成し, COVID-19 への恐怖が精神的苦痛に影響を与えていると考えた. また, COVID-

19 への恐怖が社会的役割や日課といった生活習慣や余暇活動への従事に影響し、これまで行っていた活動ができないことが、精神的苦痛につながると仮説を立てた。

### 【方法】

茨城県在住の高齢者 498 名を対象に、郵送調査 (2021 年 10 月 1 日～10 月 15 日) を実施した。本人が回答し、解析に使用する項目に欠損のない 301 名を分析対象とした。調査票には、新型コロナウイルス恐怖尺度 (FCV-19S)、現代高齢者版余暇活動尺度、生活習慣、日本語版 the Kessler psychological distress Scale-6(K6)が含まれていた。また、参加者の年齢、性別、婚姻状態、世帯構成などに関する情報を収集するための人口統計学的な内容や、主観的健康感 (1.とても健康～4.健康ではない)、定期的な通院の有無、経済状況、外出頻度 (週 1 回以上の外出の有無) を尋ねる質問なども含まれていた。

COVID-19 への恐怖は、「新型コロナウイルス恐怖尺度」を用い、7 項目の質問に対し 5 件法 (1.全くあてはまらない～5.とてもあてはまる) で回答を求めた。余暇活動は「現代高齢者版余暇活動尺度」を用い、11 項目の活動に対し 4 件法 (0.全くしない～3.よくする) で回答を求めた。生活習慣の測定は先行研究を参考に「生活パターンの満足度」と操作的に定義し、現在の生活パターン (習慣・日課や役割) に対し 4 件法 (1.満足ではない～4.とても満足) で回答を求めた。精神的苦痛は「The Kessler 6-Item Psychological Distress Scale」を用い、6 項目の質問に 5 件法 (0.全くない～4.いつも) で回答を求めた。

解析は因子分析により因子構造を確認・修正し、構造方程式モデリングを行った。統計は、IBM SPSS Statistics28 及び Amos29 を使用した。本研究は、所属機関の研究倫理審査委員会の承認 (No.2019-029) を得て、倫理規定に則り個人情報の保護や研究同意を行った。

### 【結果】

分析対象者は 301 名 (男性 23.6%, 女性 76.4%) で、平均年齢  $76.7 \pm 4.58$  歳であった。調査時に既婚であった参加者は 76%であった。また、世帯構成は 82.3%が同居者と暮らしていた。参加者の 82.9%が定期的な通院をしていたが、87.7%が健康状態は比較的健康であると回答した。また、83.6%は経済的に余裕があり、95%が週に 1 回以上の外出をしていた。居住地は、47.0%が都市部、39.9%が農村部に住んでいた。

各尺度に対して探索的因子分析 (最尤法) と信頼性分析を行い、因子負荷及びクロンバックの  $\alpha$  に基づいて項目を削除した。各尺度が想定通りの因子構造となることを確認するために、確認的因子分析を行い概ね良好な適合度が得られた。その後、構造方程式モデリングを用いて分析した。適合度は、 $TLI = 0.936$ ,  $CFI = 0.946$ ,  $RMSEA = 0.047$  と概ね良好であった。標準化係数は、COVID-19 への恐怖から精神的苦痛が 0.33, COVID-19 への恐怖から生活習慣は -0.23, 生活習慣から余暇活動は 0.35, 余暇活動から精神的苦痛は -0.33 であった。

### 【考察】

平均年齢は 76.7 歳で、参加者の大半は 75 歳以上であった。参加者の 95% が少なくとも週に 1 回は外出しており、活動的なグループであると推測される。また、県内の様々な地域から参加者が集められていることから、地域在住高齢者を代表する集団であると考えられる。

COVID-19 への恐怖は、精神的苦痛に対して影響を与えていた。つまり、COVID-19 に対する恐怖感が強いことが精神的苦痛を高めることが示唆された。COVID-19 への恐怖が精神的苦痛などの精神状態に影響を与えることは先行研究でも報告されている (Ahorsu, 2020)。本研究は 2021 年 10 月に調査を実施し、その時点で COVID-19 の流行から約 1 年半経過していた。そのため、COVID-19 への恐怖は長期的に精神的苦痛に影響を与えていた。本研究の結果は、これまでの先行研究と同様の結果であり、仮説を支持するものであった。

本研究の新規性は、これまで検討されていた 1 対 1 の関連ではなく、変数間の包括的な関連を明らかにしたことである。COVID-19 への恐怖は、生活習慣、余暇活動の従事状況を介して精神的苦痛に影響を与えていた。つまり、COVID-19 への恐怖によって、生活習慣が乱れ余暇活動への従事が制限されることで精神的苦痛が高まることが示唆された。先行研究では、COVID-19 への恐怖と精神的苦痛の関連 (Han, 2021)、余暇活動への従事と精神的苦痛の関連 (Shen, 2022) については検討されていた。しかし、COVID-19 への恐怖が生活習慣、余暇活動への従事を介して精神的苦痛に影響を与えるという包括的な関連については、新たな知見である。COVID-19 流行以前から、高齢者の健康的な生活のためには、社会活動や余暇活動を行うことが重要であることが報告されている (Kanamori, 2014)。本研究の結果は先行研究とも一致しており、COVID-19 流行下においても社会活動を行うことが精神的健康の悪化を防ぐために重要であると示唆された。

社会的状況に関係なく、社会活動に参加することは高齢者の健康にとって重要である。また、良好な生活環境を整えて好きな余暇活動を行うことも健康には重要である。したがって今回の研究結果は、新たな感染症流行や地震等の大きな災害により社会生活が制限された場合に、高齢者への影響を理解するために有益な情報となることが期待される。